天然記念物 竜野のカタシボ竹林

室　井　　綽

発見から天然記念物へ

竜野市本町にある旧藩主脇坂公の宅地にずっと以前からシボチク（皺竹）のあることは兵庫県博物学会会誌第3号（昭和7年4月発行）にも写真入りで報じている。すなわち、当時、京大講師であった田代善太郎氏が同竹林を訪ずれて研究し、その時の案内者であった博物学会会誌編集者陸井初治氏などとともに撮影された口絵が示されている。

同紙の121ページに陸井初治氏の対談記事によれば、中原健次郎氏は次のようにいっている。

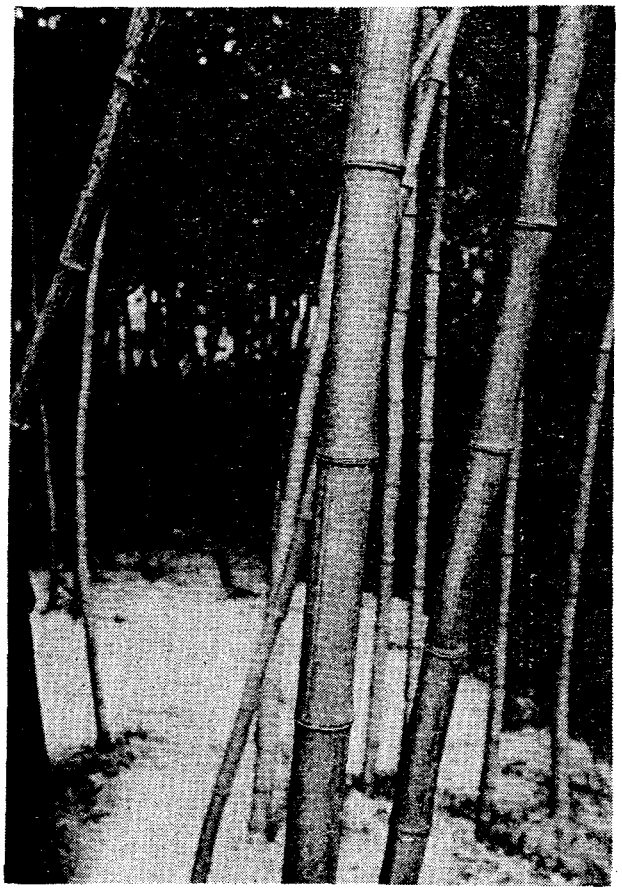
……この屋敷にはもと脇坂家の家老脇坂玄蕃の居宅があった。脇坂藩が淡路から当地へ国替になった際に移植されたものである。竹林中に甕が3つ埋って居り、井戸もある。皆、能舞台の遺跡である。初めこの能舞台の辰己の方角に風防ぎとして移植されたものである。私が幼い頃には十数本しか生えて居なかったものが、現在の様に殖えたに就いては一に先代の苦心の結果であって茶人であった先代は、「この筍は毒である」と口癖の様に教えた。毒になると聞いてはスクスク伸び出す筍を誰一人取る者が無い。私は学校を出てから開業（室井言う、医師で、もと竜野中学校校医）するようになり、筍に毒があるという事は無い筈だと、試食してみたところが、地上5寸位のものでは甘味があって馬鹿に旨いものであることが分り、類の少いシボチク、稈はなげし、蓋置きを作るによく、殊に茶杓としては他に追随を許さぬところから、茶人であった先代が案出した巧妙な保護策であったことが読めたわけである。……因に筍は6月末から7月の始めに出て赤褐色で斑点のある皮で覆われて居る。又、稈は12月に切っても切口に黴が生える様なことは決して無く、1か年位は青味を失う様なことはない。……京都市立植物園へも当所から見本として移植した。……。

上の記事にもあるようにシボチクは淡路の原産であって、その一部が当処に移植されたというので、当然シボチクであろうと心得ていたのであった。

ところが、去る昭和31年9月11日、揖竜教育研究所の苗村樹氏から、一度来て市内の先生方に学校付近の植物を指導するようにとの通知に接し午後2時過ぎに伺った。そして研究所内に山積された生徒の腊葉をみて、とっぷり日が暮れてから御案内を受けたのが、偶然にもカタシボ竹の宿、梅玉旅館であった。

私はずっと以前から上記の博物学会会誌のシボチクの記事を読んでいたので、これ幸いと夜のあけるのを待って巻寝き姿に、下駄ばきで庭の竹を見た。先ず眺めて驚いたことにはすべての学者によっていいふらされているシボチクであるは

カタシボの藪



カタシボの藪　左側の斜になった深い溝のある稈は実竹である。

ずの竹が、シボチクではなく、私の永年探し求めていた、節の半分ずつ交代に皺のあるカタシボではないか、私は大いに驚き、かつ喜んだ。躍る胸をおさえながら主人に標本に欲しいから1本伐採してくれるよう頼んでみたところが、何んでも祖先からのおきてに従って、絶対伐採しないということである。この竹は皺があって風雅なので好事家の要求にまかせて伐るとなくなってしまうということである。それに宿の主人は今日、神戸に所用があって1番列車で発たねばならない。…ということで、頼みの綱は断たれてしまった。私は何としてもくやしい。1本欲しさから、本音をはいておかみにくいさがってみた。すなわち

「この竹はシボチクなどというありふれた竹ではなく、珍らしいもので現に知られているのはここだけで、正に天下一品、天然記念物の資格が十分にある。従って研究材料と新聞社のニュースの記事の写真にしたいから、1本特に恵んでくれないか」と懇願して、やっと1本を伐採、研究材料を入手することに成功したのである。

帰神後、記事を作って、おかみに約束した通り、数日後、神戸新聞に、写真とともにのせておいた。

一方、竜野市教育委員会は私の指示に基づいて、天然記念物の申請書を県教育委員会と文部省へ、それぞれ発送した。そして何日かすぎた昭和31年1月7日、県からした調査のため県文化財保護委員会、天然記念物調査官で、兵庫農大教授の森為三博士、同会主任島田清氏、その他の面々が現地で調査された。そして全く特異の竹であるとの見解に基づいて文部省文化財専門審議会へ調査方の申請をしたのである。幸い文部省から昭和32年3月3日、審議会委員、東京大学名誉教授本田正次博士が来県され審かに調査された。その結果、珍奇なる植物の所在地として、昭和33年3月27日に天然記念物審議会で、正式に指定された。

カタシボ林の現状

場所は兵庫県竜野市本町株式会社、梅玉旅館内（社長、山本満之助氏所有）で藪は東南向きの斜面で、約5アール、目通り25cmのものが約300本、最大30cmで、見事な藪を形成している。

発見当時は殆んど投げやりで天狗巣病に大いに侵されていたが、その後、罹災枝を切り払い、雞糞、過燐酸石灰などの施肥を行なったところ、昭和33年度は37～38cmの出筍をみることができた。そして藪全体が元気づき、藪相を一変した。将来は過去のような巨大なものが想像される。

ちなみに、同旅館の一室、竹の間の床柱のカタシボは40cmという巨大なものが使ってある。

カタシボの由来

梅玉旅館主、山本満之助氏は天然記念物指定記念に栞を作って、つぎのような由来記を載せた。すなわち

竜野の藩主脇坂安宅公は純斎と号し、時の京都所司代であり、後に老中になった幕末の偉傑である。漢詩をよくし、詩聖梁川星巌に師事し、また茶道を修めその堂奥に達する風流人でもあった。

今を去る102年前の安政4年3月（西歴1857年、ハリス来りて日米修好通商条約をする。福沢諭吉私塾をおこす。井伊直弼大老となる。）、星巌は淡路より。竹数竿に一書を添えて安宅公に贈った。公は遠祖脇坂安治公旧封（旧淡路の藩主であった）の縁故ある地の珍しい竹を贈られ欣然とし、これを現在の地（旧家老屋敷の庭内で今の梅玉旅館の庭園内）

に移植し、銘竹として愛撫した。その後、星巌の死後慶応元年（西暦1865年）にその妻紅蘭が夫の遺志により再び淡路の竹1個を安宅公に贈ったが、之が有名な安宅公手造の花入（脇坂家旧蔵）であると伝えられている。

このようにして竹は移植せられた。そして、この筍を食うと腹が痛むといましめて伐らせなかったため時と共に繁茂し広大な竹藪となったが、家老職の屋敷内に在って門外不出、脇坂家一門以外の者は使用を許されなかった。すなわち、一般庶民は1株の拝領はおろか、拝見すら能りならぬため、世常には余り知られなかった。しかし、明治以後も茶人等の特殊の数奇者以外には知られなかった。しかし、注意してみると茶室の床柱、竹縁、落懸、その他、茶器や花器など愛好家仲間では輪切にしたままで珍重されるほどの銘竹で竜野付近では種々作品の点在するのを見る事が出来る。

昭和31年9月に竹の研究家、富士竹類植物園長、兵庫県立兵庫高校室井綽教諭が宿泊せられ、偶然にも発見せられ「全国を歩き廻って探したが、他には見つからなかった。全国で唯一のものだ。」と折紙をつけ、よろこばれた。続いて兵庫県文化財保護委員会、天然記念物調査官、兵庫農大副学長森為三理学博士は「おそらく世界でも珍らしい竹だ」と、また、文部省文化財専門審議会委員、東京大学名誉教授本田正次博士は「日本一の片しぼ竹」と激賞を賜わり、それぞれ詳細に調査され昭和33年3月、天然記念物に正式指定決定となった。

梅玉旅館主　識す

カタシボの名称

和名カタシボとは片皺竹の意で、マダケの稈の半面にのみ、縦溝があるのでこう命名された。学名は

Phyllostachys bambusoides Sieb. et Zucc.
var. *Marliacea* Makino
forma *Katasibo* Muroi である。

形態的特徴

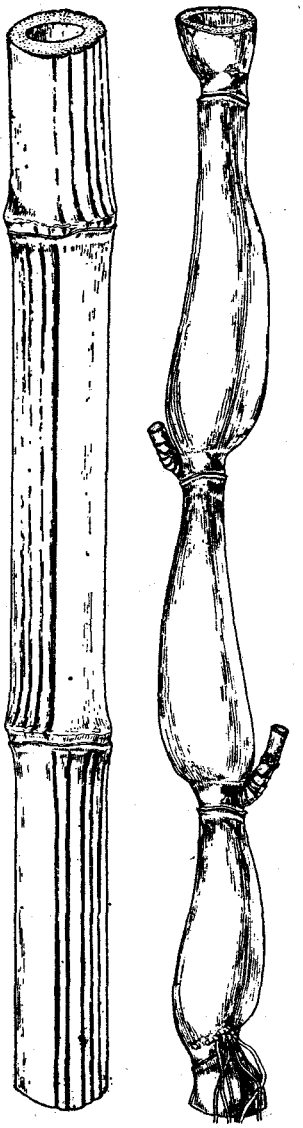
カタシボはマダケの変りもので、節間は芽の上側のみの半面が平滑でマダケと変らない。しかし、反対側は縦皺ができる。それでカタシボとは片皺竹の意である。なぜ、半面にのみ皺ができるか。

原因は維管束の発育異常で皺面の部分は維管束が相接して不正形となり、2～3個ずつが押し合って結合したり、多少離れたりして並ぶ。このことが皺をつくる直接の原因である。ところが芽の上部はどうして皺が出来ないかというと、その幾つかの維管束が枝の方に出ていき、少なくなり、維管束間に余裕ができ、維管束は普通に発育し尋常の竹稈となる。以上のことから半面のみに皺を生ずることになる。つまり、普通のマダケに比べて維管束が著しく多い。それで竹稈が固く、各種の装飾用に珍重される。

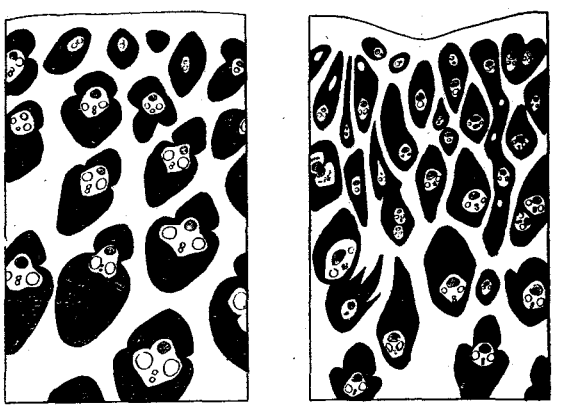
以上のような奇形は竹類中としても、あるいは単子葉植物中、全く類例をみない珍現象で、非常にまれなものである。

この母種のシボチク（皺竹）は淡路島、洲本の原産といわれているが、今日では残念ながらその原地は絶えてしまった。幸にもその一部の移植といわれる当地のものは、さらに芽条変異の著しいもので、一層、学問的に珍奇で、永久に保護して後世に引き継ぐ責任がある。

私は1月27日（1957）、当竹林内で枯



カタシボとラッキョウヤダケ（右）どちらも芽のある側が常に正常を保っている。



稈の横断面における維管束の配列状態を示す。
左はマダケ、右はカタシボの皺のよった側。

れた稈から子嚢菌を採集して，竹類寄生菌図説を執筆されつつある日野巌博士にお送り申しあげたところ、次の２種は新種の由で

Phlyctaena Muroiana Hino et Katumoto

Schizostoma Muroiana Hino et Katumoto

と命名発表された。また次の既知種も採集された。

Didymosphoeria striatula Penzig et Saccardo var. *minuta* Hino et Katumoto

Eutype Kusanoi P. Hennings

Hypoxylon juscopurpureum (Schweinitz) Berkeley

Physalospora inamoena Hino et Katumoto

なお、シボチクは四国、滋賀県、京都府、その他にかなり栽培されている。市場性はシボチクの方が著しく高い。

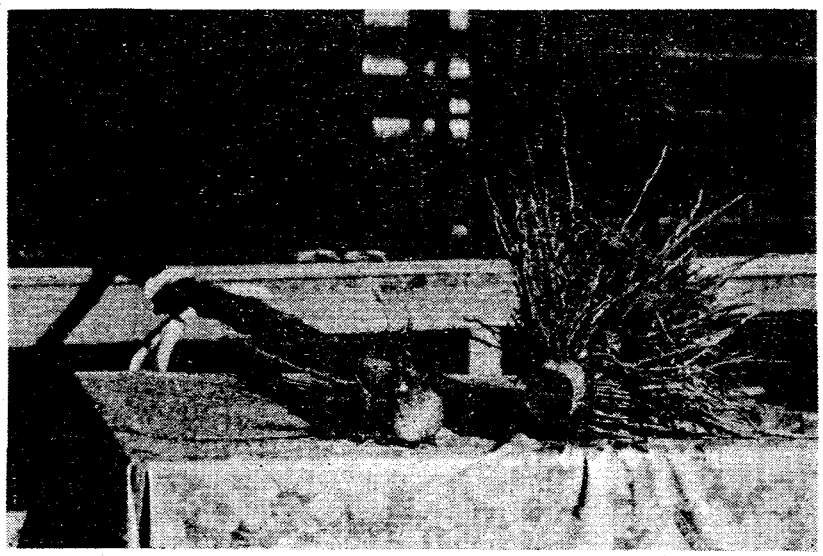
カタシボ林の特徴

カタシボの遠望は太さの割に丈が低く、枝張りがマダケに比べて短く、最下枝は殆んど１本で、いわゆる男竹であること、もう１つ特に面白い現象は実竹が非常に多く発生することである。原因として考えられることは山麓の斜面に藪のあること、石英粗面岩の岩盤があって表土が浅く、それに石塊、瓦などが多く捨ててあることが考えられるが、しかし最大の原因は不明で、他にあると思われる。

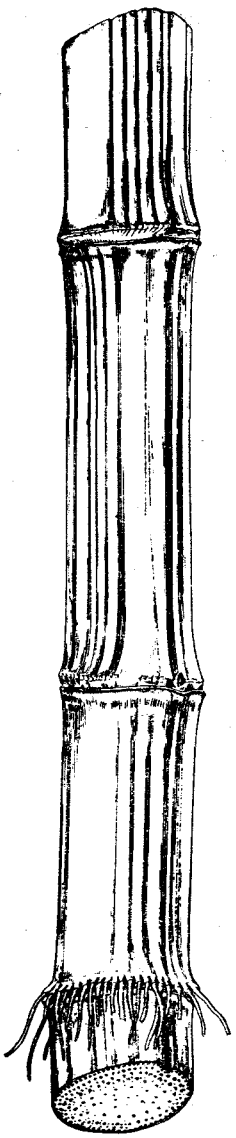
かつて、天然記念物調査委員を案内した時に、多数の新聞記者に包囲されて参加者諸氏をからかってみた。すなわち

私はカタシボ竹林内で「この竹には片一方に交互に皺のあることは御覧の通りだが、もっと珍らしいことは、普通の竹のような穴がないことである……。」とやった。ところが側で聞いていた館主、山本満之助氏はあわてて私に「先生とんでもない。どの竹にも大きな孔があります……。」という。私は重ねていった。「御冗談ですよ。木のようになかまで詰っていますよ……。」と。側で聞いていた新聞記者氏「では１本伐ってみよう。」私は大賛成、早速、私が節の間をぶっすりと切ってみせた。多くの人々は覗き込んで「やはり、室井のいうように孔がない。」主人は驚いて「ではもう１本伐ってみよう。」私は「折角、天然記念物に申請しようというのに全部伐採しては駄目ではないか……。」と主人の主張に反対したのであった。

後程、一同はお神酒を御馳走になったが、私は余り弄ぶのも罪悪と考え、「先刻，藪で伐採したのは、実は実竹（じっちく）という非常に珍らしいもので普通品には主人の主張通り大きい孔がある。」と訂正しておいたが、続いて「実竹は地下茎の先端が何かにぶち当って進行を拒まれ、地上に頭をもたげて伸び、竹稈になったものである。元来、地下茎には孔がないの



カタシボの宿所蔵の実竹の横断面を示す



カタシボの実竹

で、この延長の稈にも孔がない。さらに普通の孔のある竹との見分け方について、ひとくさりやったことは勿論である。すなわち

先ず、稈溝の深いことで、深いものほど充実していること、稈脚の地上部2～3節までも鬚根の生えていること、稈脚が多少曲っていること、同年のものに比べて緑が濃いこと、最下枝が1本のみ出ていること、全体がさらに短いことなどについて説明を加えておいた。ところが、お神酒で酔っぱらった諸氏、原稿の訂正を怠ったので、とうとうカタシボは孔のない木のような竹であるなどと幾つかの新聞記者は報道してしまった。それで、方々から物好きが私に問い合わせがやって来た。結局、多忙で泣いたのは悪の種を蒔いた私で、総ての罪を被いかぶせられた。

この実竹は去る昭和32年2月に調査したところ、この藪中に8本も数えることができた。それは 500本に対して8本であるから 1.6%という高率である。マダケの藪などで探すと1日歩いても1本見つかるか、否かというほど珍らしいものなのである。

なお、調査当日伐採した巨大な実竹は同館の宝物として地下部から掘りあげて洗い、玄関に並べて観覧に供しているから、形態、成因などについて御覧願えれば幸いである。

参 考 文 献

1. 陸井初治；シボチクに就いて、兵庫県博物学会会誌 第3号）昭和7年4月）
2. 田中真治；シボ竹、播磨新聞、第278号（昭和31年10月28日）
3. 室井綽；県下の植物分布、兵庫県生物誌、神戸新聞社刊（昭和31年11月）
4. 本田正次；カタシボの調査、植物の友、第57号（昭和33年4月）
5. 山口国俊；竜野の片シボ竹、植物の友、第59号（昭和33年6月）
6. 山本満之助；片しぼ竹、天然記念物指定記念、（昭和34年2月）
7. 室井綽；天然記念物カタシボ、神港新聞、第4759号（昭和34年2月7日）

丹波栗と足利義詮の伝説

井　上　三　義

丹波と言えば栗を連想するほどに、丹波と栗とは深い因縁がある。古くから丹波栗の名産地として京都府船井郡和知や兵庫県氷上郡山南町（旧小川村）等が知られている。このたび山南町の郷土名物として「クリセンベイ」が発売される計画があり、小川村産のテテウチグリと足利義詮との伝説について室井綽先生からぜひ報告せよとのことであるから以下それについて簡単に記してみよう。

テテウチは氷上郡山南町岩屋の原産である。観応2年正月16日（今より約600年前）足利義詮は、15日の戦に桃ノ井の軍を破つて大勝したが、諸人の推量と異なり京都勢の大半が15日の夜半に八幡山にいた三条慧源の下にはせ集まつたので、もはや洛中で再び戦う能わずとさとり、西国に退いて兵を養おうと思い16日早朝京都を出発し丹波路へ落ちのびた。父尊氏は西下したけれども名将が一カ所に居るのは却つて不利であるとて義詮は父尊氏と分れて2,000余騎を従えて井原郷石龕（現在の山南町岩屋）に留つた。ここにある足利橋は其橋下に義詮がかくれて追手の難をまぬがれたところで、ここから岩屋に向ったという。

往時の石龕寺は現在の寺の奥の院であつて登るのも容易でない険峻の地にある岩窟であつた。義詮を迎えた石龕寺の衆徒は護摩をたいて将軍の武運を祈つた。その満願の日、院主雲暁僧都は足利将軍に対面して、天下を静め大敵を亡ぼすの要諦は毘沙門天の法に及ぶものはないと進言したので義詮も熱心に信仰して丹波国小川庄を寺領として寄進した。

雲暁僧都がこの地の名物だとて大栗を献上したところ義詮は、只一果を残して皆部下兵卒に分ち与え、さて残した一果の栗の座に手ずから爪痕をつけて「都をば出て落ち栗の芽もあらば、世に勝ち栗とならぬものかは」という一首をそえて雲暁僧都に渡し栽植するように命じた。発芽せば都に出たと知れ、結実せば天下を領したと知れと言つた言葉にたがわず、何れの果実にも爪痕のある栗がなつたと言い伝えられている。

元来本種は果梗強く容易に果が脱落しないために、成熟した果実ばかり出て落ちるので、デテオチ即ちテテウチと言われるようになつたのである。このクリの果の座の中央にある爪痕は実は維管束の痕である。この地は岩屋の名にふさわしく全山が岩盤で出来上つているから根の発育が妨げられて、このような爪痕を生ずるらしく、肥沃土に栽植すると次第に之が減って来る。このクリは品質上等で10月中下旬に熟する。